「憲法9条フェスタ」

戦争を起こすのも止めるのも人間
主権者国民が世界史を変える

3月29日の「憲法9条フェスタ」（既報）では、元日本興亜損保（旧日本火災）の社長・会長、経済同友会終身幹事で国際開発センター会長の品川正治氏を招き、記念講演「戦争・人間・そして憲法9条」を開きました。講演要旨を掲載します。（文責＝編集部）

「戦争・人間・そして憲法9条」
品川 正治 氏の 講演要旨

戦争で多くの友を失い、今も右足に破片が

品川氏は、先ず「一身にして二世を生きた」（福沢諭吉）自己紹介から語り、1924（大正13）年生れの氏の前半の22年間は、大日本帝国憲法の下で天皇の赤子として生き、その後の63年間は日本国憲法下で主権者の一人としての日本国民として生きてきたと振り返りました。中学に入学したときに日中戦争が、高校（京都の三高）へ入った年に太平洋戦争が始りました。

そして、文科の徴兵猶予が廃止され、学生たちは皆あと2年しか学問が出来ないと知り、死ぬまでに読んでおきたい本をリストアップしてポケットに入れ、必死に読んでは消していったといいます。

やがて、鳥取の連隊に召集され、2週間後に北支派遣軍として中国北部の戦地へ向かいました。目的地へたどり着くまでも激しい戦闘続きでした。そして、白兵戦の追撃砲で身体に4発の破片を浴び、意識を失って数時間倒れていたこともありました。

幸い生きて帰ることができましたが、今も右足に破片の一部が残っています。

トラウマで60余年間戦争を語れず

しかし品川氏は、80歳になるころまでは自身の戦争体験、戦場の体験は家族にも話してきませんでした。それはあまりに悲惨で、またあまりにも多くの戦友を失っていること、「どうしてあなただけが助かって帰ってきたの」と言われると後が続かなくなり、また「やられた、助けてくれ！」という塹壕で聞いた戦友の声を見殺しにしたというトラウマがあったからでした。

80歳になるころから、やはり本当の戦争の実体験を伝えていかないといけないのではないか、あの戦争を体験した人たちが次々と亡くなってしまうので、なんとか正確な記録を遺したいと思うようになったといいます。

そして、亡くなった戦友の郷里である鳥根県の寒村に出向いて講演したとき、戦友の遺族や親戚たちが集まりました。そこで品川氏が、戦友を救えなかったことを手をついて謝まると、会場の人々もみな泣きました。それでやっと品川氏のトラウマが消え、戦後60年を経てようやく戦争の話が出来るようになったといいます。

帰国の船で見た日本国憲法案と第9条

終戦後もすぐには帰国できず、1946年5月1日に上海経由で山口県の仙崎港に帰還しました。その頃、船中でヨレヨレの新聞が各中隊へ、配られ、確か3月4日付と記憶しているタブロイドの紙面に、日本国憲法改正案が載っており、中隊長から言われて品川氏がみんなの前でそれを読みました。その第9条のところに来た時、全員が泣きだしました。「戦争放棄」、我々はそういう憲法を実現したいと思っていた。これなら亡くなった戦友の霊が浮かばれる、中国の何千万人に犯した罪を贖罪できると思いました。中隊長も号泣しました。それが品川氏の今の憲法との初めての出会いでした。その憲法をいま捨てるなどということは考えられないと。

品川氏は、しかしこの間、日本の権力を握っていた層が、解釈改憲を押し進め、自衛隊の創設、有事法制制定、そしてついにイラクに自衛隊を派遣しソマリア沖に派遣するまでになり、憲法9条第2項と現実とがまったく異なる状況にさせられてしまっていることを振り返り、もはや旗はボロボロでも国民は旗を握って離さない。これが今の憲法の状況だとしました。

だが品川氏は、「戦争は起こすのも人間だが、それを止められるのも人間だ」と し、“戦争を人間の目で見て否定した”のが世界に例のない今の日本国憲法だと語りました。

この日本国憲法はまさに天からの授かりものと言ってもよい。なぜなら、もう少し遅れたら中国革命が起こり、朝鮮戦争が始り、米ソの冷戦が激化していたから。それをなぜ今捨てようとするのか、と説きました。

“経済を人間の目で”が品川氏の基本テーマに

品川氏は、同じように“経済を人間の目で見る”ことが氏の経済人としての基本テーマだったと語り、昨今、グローバリゼーションと称してアメリカの金融システム等を経済界に持ち込み、格差と貧困を拡げてきた新自由主義政策を厳しく批判しました。そして何故アメリカ型の市場原理に変えなければいけないのか？と糾弾し、医療や福祉、教育、環境、農業などは市場で決定できるような条件は何も無く、人間の努力なのだとし、その人間の努力こそ政治なのだと語りました。

アメリカ型が正しいとして強引に進めてきた規制緩和の中でも、最大の罪が雇用に現れたとし、非正規労働者の激増と、大企業が率先して派遣切りを進めてきたことを厳しく批判。昨年来の小説「蟹工船」への注目や、更に昨年末の東京日比谷での年越し派遣村の登場がものすごく大きな効果をもたらしたとしました。

それは非正規の労働者の惨めさが国民の前に広く明らかになり、「大企業は国民の敵だ」という世論が生れてきたことでした。そして品川氏は、現在の不況をどう乗り越え、耐えていくかが、これからの日本の針路に大きな影響をもつだろうと見通しました。

しかしながら、表面の政治の状況は「自民か民主か」などであり、また「アメリカと価値観を共有して云々」にとらわれたままです。

「9条改憲ノー」の決断で世界が変わる

ではどうしたらよいのか。品川氏は、政治や行政、あるいは司法には任せられない。結局は国民一人ひとり、主権者たる国民にやっていただく以外にないとし、今後迎えるかもしれない憲法をめぐる国民投票やあるいは総選挙で、「私は人間です」、「9条改憲ノー」と、はっきり言っていただければ日本の政治は変わる、みなさんの決断が世界史を変える、今こそ出番だと、静かに、しかし力を込めて呼びかけました。